科目名 (科目番号)	臨床薬理学 (時間割参照)	教員名	幸田 幸直	学科等	医療技術	必修	履修年次	2
				曜日・時限等	時間割表参照		単位数	2
				授業形態	講義	オフィスアワー	臨床検査学科	

授業概要	臨床薬理学とは「薬物の人体における作用と動態を研究し、合目的薬物治療を確立するための科学である」と定義される。具体的には臨床で使用される薬剤の作用機序、適応などを中心に学ぶ。具体的には薬理作用・用量反応性・受容体に影響を与える因子について学ぶ。さらに呼吸器系薬剤（気管支拡張剤・鎮咳薬など）、循環器系薬剤（強心剤・血管収縮または拡張薬など）、利尿薬、脳神経系薬剤、鎮静薬、鎮痛薬、抗生物質などについて学ぶ。
目的・目標	目的:臨床工学技士として医療現場で医師や薬剤師と円滑に協働できるように、薬物および薬物治療について基礎的な知識を習得する。 目標:薬物の生体への作用、投与された医薬品の生体内での変化、医薬品の取り扱い上の注意点などについて、医療現場で使用されている基本的な医薬品を中心に理解する。
準備学習	毎回の授業について少なくとも1時間程度の予習・復習をすること。

授業計画	回	授業項目	到達目標・学習内容
	1	薬理学を学ぶにあたって	薬理学とはなにか、薬による病気の治療などについて理解する。
	2	薬理学の基礎知識　Ⅰ	薬が作用するしくみ、薬の体内の挙動(薬物動態学)、薬物相互作用などについて理解する。
	3	薬理学の基礎知識　Ⅱ	薬効の個人差に影響する因子、薬物使用の有益性と危険性、薬と法律などについて理解する。
	4	抗感染症薬	感染症治療に関する基礎事項、抗感染症薬各論、特殊な感染症の治療薬、感染症の治療における問題点などについて理解する。
	5	抗がん薬	がん治療に関する基礎事項、抗がん薬各論などについて理解する。
	6	免疫治療薬	免疫系の基礎知識、免疫抑制薬、免疫増強薬・予防接種薬などについて理解する。
	7	抗アレルギー薬、抗炎症薬	抗ヒスタミン薬と抗アレルギー薬、炎症と抗炎症薬、関節リウマチ治療薬、痛風・高尿酸血症治療薬、片頭痛治療薬などについて理解する。
	8	末梢での神経活動に作用する薬物	神経系による情報伝達、自律神経系作用薬、交感神経作用薬、副交感神経作用薬、筋弛緩薬・局所麻酔薬などについて理解する。
	9	中枢神経系に作用する薬物	中枢神経系のはたらきと薬物、全身麻酔薬、催眠薬・抗不安薬、抗精神病薬、気分障害治療薬、パーキンソン症候群治療薬、抗てんかん薬、麻薬性鎮痛薬などについて理解する。
	10	心臓・血管系に作用する薬物	抗高血圧薬、狭心症治療薬、心不全治療薬、抗不整脈薬、利尿薬、脂質異常症治療薬、血液に作用する薬物などについて理解する。
	11	呼吸器・消化器・生殖器系に作用する薬物	呼吸器系に作用する薬物、消化器系に作用する薬物、生殖器・泌尿器系に作用する薬物などについて理解する。
	12	物質代謝に作用する薬物、皮膚科用薬、眼科用薬	ホルモンとホルモン拮抗薬、治療薬としてのビタミン、皮膚に使用する薬物、眼科用薬などについて理解する。
	13	救急の際に使用される薬物、漢方薬、消毒薬	救急に用いられる薬物、急性中毒に対する薬物、漢方医学の基礎知識、漢方薬各論、消毒薬などについて理解する。
	14	輸液製剤・輸血剤	輸液製剤、輸血剤などについて理解する。
	15	業務に必要な関連知識	薬に関する単位、処方せん、添付文書などについて理解する。

成績評価の方法・基準	対面時:期末試験(100%) オンライン時:オンライン期末試験(100%)		
教科書	シンプル薬理学(改訂第6版)	野村隆英、石川直久、梅村和夫 編集	南江堂
参考図書	臨床薬理学(第4版)	日本臨床薬理学会　編集	医学書院
教員からのメッセージ	基本的な重要事項は反復して学習し、知識の応用が効くように系統的理解に努めてください。 教科書とプリントを併用しますので、必ず両者を手元において受講してください。 豊富な病院勤務経験をもつ薬剤師が、この授業を担当します。 オンライン授業に伴い授業計画に変更がある場合は、オンラインクラスで変更のシラバスを周知します。		